

麻疹(はしか)及び・風しん(三日ばしか)の予防接種について

麻疹(はしか)・風しん(三日ばしか)について

(1) 麻疹(はしか)について

麻疹ウイルスの空気感染によって起こります。ウイルスに感染後、無症状の時期(潜伏期間)が約10~12日続きます。その後、症状が出始めますが、主な症状は発熱、せき、鼻汁、めやに、赤い発疹です。症状が出始めてから3~4日は38℃前後の熱とせきと鼻汁、めやにが続き、一時熱が下がりがけたかと思うと、また39~40℃の高熱となり、首すじや顔などから赤い発疹が出始め、その後発疹は全身に広がります。高熱は3~4日で解熱し、次第に発疹も消失しますが、しばらく色素沈着が残ります。

合併症を引き起こすことがあり、主な合併症としては、気管支炎、肺炎、中耳炎、脳炎などがあります。発生する割合は麻疹患者100人中、中耳炎は約7~9人、肺炎は約1~6人であり、脳炎は約1,000人に1~2人の割合で発生がみられます。また、麻疹にかかると、数年から十数年経過した後に、亜急性硬化性全脳炎(SSPE)という重い脳炎を発症することがあります。これは麻疹にかかった人のうち10万人に1~2人の割合で見られます。また、麻疹にかかった人のうち、数千人に1人の割合で死亡することがあります。

(2) 風しん(三日ばしか)について

風しんウイルスの飛沫感染によって発症します。ウイルスに感染してもすぐに症状が出ず、約14~21日の潜伏期間がみられます。その後、麻疹より淡い色の発疹、発熱、首の後ろのリンパ節が腫れるなどが主な症状として現れます。そのほかに、せき、鼻汁、目が赤くなるなどの症状がみられることもあります。

合併症として、関節痛、血小板減少性紫斑病、脳炎などが報告されています。血小板減少性紫斑病は風しん患者約3,000人に1人、脳炎は風しん患者約6,000人に1人ほどの割合で見られます。大人になってからかかると、子どもの時より重症化する傾向が見られます。妊娠早期に風しんにかかると、先天性風しん症候群と呼ばれる病気により、心臓病、白内障、聴力障害を持った子どもが生まれる可能性があります。

麻疹風しん混合ワクチンについて

麻疹・風しん混合ワクチンは、麻疹ウイルス及び風しんウイルスを弱毒化してつくったワクチンです。1歳から2歳の間に麻疹又は風しんにかかる可能性が高いので、1歳になったらなるべく早く接種を受けましょう。

1回の接種で95%以上の子どもは、免疫を得ることができますが、つき損ねた場合の用心と、年数がたって免疫が下がってくることを防ぐ目的で、2回の接種が行われるようになりました。(第1期として1歳以上2歳未満で1回接種し、第2期として小学校就学前の1年間の期間に1回接種を行います。)

輸血をされたり、ガンマグロブリン製剤の注射を受けた方は、接種時期について医師と相談してください。

副反応

主な副反応は発熱や発疹で、その他注射部位の発赤、膨張(はれ)、硬結などの局所反応、じんましん、リンパ節膨張、関節痛、熱性けいれんなどがみられます。また、アナフィラキシー、血小板減少性紫斑病、脳炎、けいれんなどの副反応が、稀に生じる可能性があります。

対象者及び接種スケジュールについて

接種対象者(対象年齢)

1期

生後12か月以上24か月未満

※対象年齢を過ぎると、公費での接種は受けられなくなります。

※2期は、5歳以上7歳未満で、小学校就学の前年度の4月下旬に接種推奨します。

接種時に持参するもの

- ① 麻疹・風しん予防接種予診票
- ② 母子健康手帳(接種歴を確認するとともに、予防接種を受けたことを記録します。)